



タイトル Title	「不潔」と「恐れ」：文学者に見る日本人の韓国イメージに関する一試論
著者 Author(s)	木村, 幹
掲載誌・巻号・ページ Citation	MINERVA日本史ライブラリー5『近代日本のアジア観』, :103-120
刊行日 Issue date	1998-05-15
資源タイプ Resource Type	Book / 図書
版区分 Resource Version	author
権利 Rights	
DOI	
JaLDOI	
URL	http://www.lib.kobe-u.ac.jp/handle_kernel/90000378

目次

はじめに ― 日本人の韓国イメージ
第一節 韓国イメージの前提条件
第二節 「脱亜入欧」の韓国イメージ
第三節 三一運動と韓国イメージの展開
むすびにかえて

はじめに

『ところで、韓国って、恐くありませんか？』

筆者が、比較政治のケーススタディとして、韓国の近代化過程を研究しはじめてからもうずいぶんになる。その間、いろいろな方とお会いし、自らの研究について話して来たが、冒頭に記した言葉は、そのような筆者が、いくどとなく尋ねられた数多くの質問のうちの一つである。結論から言うなら、北朝鮮の領域をも含めて、朝鮮半島は、日本に匹敵する ― それは即ち、世界で最も、ということでもある ― 治安の良い地域の一つであり、旅行や生活を行うに当たって、外国人にとっても「恐く」はない数少ない国家の一つである。勿論、このような質問が出てくる背景には、韓国人¹⁾が現在に至るまで持ちつづけている反日意識や、テレビ等のマスコミを通じて伝えられる反日デモ等のイメージがあるのであろうが、現実にもその場で暮らしてみればわかるように、それらは日本において我々が想像するほどには極端なものではないし、また、個々の日本人がその直接的な攻撃に出会うことは、少なくとも今日においては、ほとんど見られなくなっている。

「イメージ」というものは、個々人の持つ価値観等から一定の影響を受けるものであり、それゆえ、それが現実と異なるのはある程度仕方がない、といえはそれまでであるが、それにしても、日本人の韓国イメージがいささか現実との乖離を見せていることは、否定のしようのない事実であろう。韓国人が日本人に「恐れ」を抱くなら、それは彼等の日本統

治時代の経験からある程度理解することができる。しかし、韓国を支配したのは、我々日本人である。我々はどうして、韓国や韓国人に「恐れ」を抱くようになったのであろうか²。

韓国に対する否定的イメージは左記のような「恐れ」とか「危険」というものだけではない。これまた、筆者が幾度となく尋ねられた質問の一つでもあるのであるが、それは「韓国は汚い」というものである³。韓国で暮らしたことがある者なら、誰しも気づくことであるが、確かに、今日の日韓両国における衛生観念や習慣 — たとえば、入浴の回数や、手を洗う回数 — 等において違いがあることは事実であろうが、ここで言われるような「汚い」というイメージは、それとは若干次元の異なるように筆者には思われる。たとえば、単に入浴の回数を問題にするのであれば、西洋人とて、日本人のように頻繁に入浴を行うわけではないが、我々はこれをもって彼らを「汚い」とは言わないであろう。更にいうなら、韓国に直接携わる生活をしている少数の人間を別にすれば、ほとんどの日本人は、韓国人の生活について — 西洋人の生活習慣についてそうであるように — 特に詳しく知っているわけではない。いいかえるなら、それは、我々日本人が、韓国人や彼らの生活習慣についてよく知らないまま、彼らに対して一方的な「イメージ」だけを有している、ということの意味している。それなら、このようなイメージは一体どこから生まれ、なぜ、我々日本人の間に定着したのか。

本稿は、このような日本人の持つ韓国に対する、二つの否定的イメージについて、その形成過程を歴史の中から明らかにしようとするものである。したがって、それは「日本人が偏見を有している」ということを倫理的に議論しようとするものではないし、また、それを批判したり、逆に正当化しようとするものではない。その意味で、本稿はあくまで学問的な範疇に属するものであり、そこから明らかにされる歴史的事実や日本人の韓国イメージに対する「評価」については、読者諸氏の判断にお任せしたいと思う。筆者の以上のような立場について、御理解いただければ幸いである。

さて、このような日本人の「イメージ」について、本稿において主として用いるのは、明治後期から戦前昭和期に至るまでの、日本文学者が朝鮮について記した作品である⁴。勿論、このような「イメージ」を分析する際には、時の政府高官やマスメディアのそれを用いることが重要であることは、筆者も良く理解しているつもりであるが、あえて扱いの難しい文学作品を用いる理由は以下の通りである。

- 一) 一般日本人の韓国イメージにおいて、公的文書より大きな影響力を有していたこと。
- 二) イメージや偏見については、公的文書や報道においては、それらが注意深く回避されていることが多いのに対し、文学作品においては、文学的表現の一環として、それらが

比較的明瞭に、表現されていることが多いこと。

三) 様々な文学作品を扱うことにより、イデオロギ―的差異を越えた分析が可能であること。

本稿の趣旨については、以上で十分であろう。それでは、早速、本文に入っていくこととしよう。

第一節 韓国イメージの前提条件

まず、議論の前提として、本稿が主たる対象とする明治後期以降より以前の時期における、日本人の対韓国イメージについて簡単に整理してみることとしよう。

江戸期の韓国に対する日本人の認識については、七〇年代以降、盛んに研究が行われており、今日まで相当な部分が明らかになっている。このような江戸時代の対韓国イメージ研究において、最も注目されてきたのは、いうまでもなく、朝鮮通信使に際しての日朝両国民の交流であり、そこでは多くの場合、かつては両国間に「善隣関係」が存在していたこと、そして、それを通じて両国の間には、近代とは異なる両国民間の「友好」ムードが存在していたことが強調される⁵⁾。

しかし、現実の江戸期の日朝関係はそれほど単純なものではなかった。当の朝鮮通信使を巡ってさえ、日朝両国の官僚達は、儀礼作法や通交ルート等を巡って、激しく対立していた⁶⁾。し、そもそも二六〇年間の江戸期において僅か一三回しか派遣されてこなかった通信使の存在を過大に評価することは、控え目にいって危険であろう。現地交渉と通商の実務に直接携わっていた対馬藩関係者を除けば、江戸期の人々が「朝鮮」と接する場は、現実には極めて少なく、その結果、彼らの韓国認識も、多くの場合、現実の伴わない偏見と過大評価の双方の傾向を有するものであった。

もともと、そのことをもって、江戸期の朝鮮認識が、明治以降のそれと同じものであった、とするなら、それもまた事実とは若干異なっている、というべきであろう。そこで筆者なりにこの時代の朝鮮認識について、中心となるものを二つ挙げておくと、まずその第一は、儒学者達に見られた、「儒教の国朝鮮」のイメージであり⁷⁾、二つ目は、広く武士層に存在した「軍事的弱体国朝鮮」のイメージであろう⁸⁾。前者については、山崎闇斎等の儒学者達は、朱子学を理解する前提となるテキストとして、李退溪等の著作から大きな影響を受けており、その結果、彼等は朝鮮の文人に大きな尊敬の念を持つに至っていた。後者については事情は若干複雑である。日本史でいう文録・慶長の役、朝鮮側のいう壬辰倭

乱は、今日の観点からみれば明らかな日本の軍事的敗北であったが、緒戦における朝鮮王朝軍のあつけないまでの敗走は、日本側に朝鮮は軍事的には取るに足らない弱国である、という認識を強く植え付けることとなった。加えて、有名な碧鄭閑の戦いに代表されるように、陸上戦闘における主力決戦が、朝鮮王朝軍との間ではなく、朝鮮救援に駆けつけた明国軍との間で行われたこと、また、この戦争の終戦処理交渉の過程においても朝鮮王朝の代表が排除され、それが豊臣政権と明との間の直接交渉によって行われたことは、日本側に「自分達は朝鮮にではなく大国明に敗れたのだ」という論理を可能にし、結果として、日本は遂に朝鮮には敗れなかったのだという認識を武士層に抱かせ、更にはそれが日本書紀的な「朝鮮は本来日本の属国である」という歴史認識により強化されるに至っていた。

このように経緯を辿った江戸期の韓国認識ではあったが、今日において注目すべきは、このような日本側の一方的な認識にも拘らず、そこにおいては、今日における韓国に対する二大マイナス・イメージである「不潔」と「危険」という要素がみられない、ということであろう。このことは、この時代と明治後期以降の韓国認識の間に、明らかな断絶が存在していたことを意味している。いしかえるなら、それは我々が、これらの意識の根源を江戸期以前にではなく、明治後期以降の両国関係と日本の国内事情に探さねばならないことを意味している。

以上のような、江戸期の認識は、基本的には明治前期においても大きく変わることはなかった。この時代において、最も注目すべきは、言うまでもなく征韓論の台頭であろう。征韓論については、それが幕末の尊王攘夷思想と、ウエスタン・インパクトに伴う「海防論」の登場と一定の関係を有していることが、幾度となく指摘されている。が、このことは必ずしも、征韓論と江戸期の韓国認識イメージが断絶していることを意味するものではない。むしろこれらは、江戸期における二つの韓国イメージの一方、すなわち、「朝鮮弱国論」の延長線上にあるものであり、それが、いわゆる「帝国主義の時代」に突入すると同時に、日本人のネーション意識の不十分さとあいまって、朝鮮に対する軍事行動への動きとなったものであると理解されるべき現象であろう。すなわち、朝鮮は江戸期から明治初期に至るまで、武士層、特に文録・慶長の役の経験を強く継承する西南諸藩の武士層において、取るに足らない軍事的弱国として位置付けられており、それゆえ、不平士族の不満解消や政治的ライバル追い落とし、という極めて国内的且つ政治的な目的の為、安易に「征討」出来る程度の存在と看做されていた、ということが重要なのである。事実、征韓論論争においては、征韓の前提となるべき朝鮮の軍事力については、ほとんど検討されておらず、西郷・江藤等がそれについて真剣に考慮していたとは到底思えない。このことは彼等が、

討幕において見せた、軍事的リアリズムの姿勢と比較して見た時、極めて印象的な事実であろう。

朝鮮は取るに足らない小国であり、それゆえ、真剣に検討するに値しない。このような姿勢は、本稿で主たる資料として取り上げる文学の世界においても同様である。明治前期の日本人の海外への関心は、ほぼその全てが西洋に向けられており、明治二〇年代以前において、朝鮮について言及されている文献を探すことは、今日では、ほとんど不可能といつて良い状況である。高崎隆治によれば、日本文学者がはじめて本格的に朝鮮について取り上げた著作は、明治一九年、福沢諭吉の「金玉均氏」である、ということになる¹⁾が、これとてその内容をつぶさに検討するなら、それは飽くまで朝鮮に関する政治的パンフレットに過ぎず、そこからこの時代の韓国認識を読み取ることは難しい¹⁾。

一言で言うなら、今日、我々が有している韓国に対する二大マイナス・イメージ、「不潔」と「危険」は、明治後期以降の時代状況の中から生じて来たものであった。それなら、このような韓国認識はどこからきたものなのであろうか。次にこの点を分析するために、明治後期から大正前半期の日本人の韓国認識についてみていくことにしたい。

第二節 「脱亜入欧」の韓国イメージ

左記のような政治的パンフレットを別にするなら、日本文学者が朝鮮に関する著作をものにするようになるのは、二〇世紀に入ってからのことである。この時期の彼らの著作の特徴を一つだけ挙げるなら、それはその大部分が紀行文、もしくはそれに近い形で書かれている、ということであろう。山路愛山・徳富蘇峰・夏目漱石・高浜虚子・谷崎潤一郎らは、併合を前後する時期、相次いで朝鮮半島を訪れており、彼らはそれぞれの観点から朝鮮に対する印象を記している。その背景には、日露戦争勝利により、日本の実質的な朝鮮半島への支配権が国際的に承認され、半島が日本人にとって身近な存在となったことがあるのであろう。

このような日本文学者の中でも特に朝鮮に注目し、これに対して繰り返し自らの印象を語ったのが、高浜虚子である。そこで、以下、高浜虚子の韓国イメージを紹介することにより、この時代の日本文学者の韓国認識をみてみることにしたい。

虚子がはじめて朝鮮に対する紀行文を記したのは、一九一一年、東京毎日新聞に掲載された「朝鮮」という文章においてである。この時期、虚子は日清戦争当時に朝鮮に移住した妻の叔母の訪問を兼ねて朝鮮を訪問しており、この前後の彼の朝鮮に関する一連の著作

は、この時の経験を基にしているものと思われる。そのような虚子が、その時の記録を一冊の書にまとめたのが、翌年に発行された『朝鮮』である。それでは彼は朝鮮をどのように見ていたのか。

注目すべきは、この虚子の著作においては、今日の日本人が有する韓国に対する二大マイナス・イメージの一つ、韓国人の「不潔」に対する記述が頻繁に見られることであろう。たとえば次のような一節が代表的なものである。

『「もう斯うなつちや日本人の方が朝鮮化してしまうのだ。」と言って顔をしかめた。けれども此の朝鮮町の中に在つて見るもの聞くもの悉く朝鮮のもの許りで、さうして朝鮮人同様の汚い貧しい生活をしてゐて其でゐて矢張り日本の服を着日本の髪を結び、汚い埃の中に其髪を髪を梳きつけてゐるのを見て余は必ずしも星野の言葉を信用しなかつた¹²。』

虚子の文章はこの調子で淡々と見聞きした朝鮮の風景や出会った人々を描写していく。そこにおいて虚子が強調するのが、韓国人の「不潔」であり、また、それとは対象的な日本人の整頓や「奇麗好き」であつた。

それなら虚子はこのような両者の違いの原因をどのように考えていたのであろうか。その手がかりとなるのは次の文章である。

『余は内地に在る間は我が国民といふものを一民族として多くの人間から切り放して考へるべく餘り其機會を持たなかつた。従つて海外の發展といふ事に就ても深い考慮を費した事も無く、陸海軍人の赫々たる功名に就ても世の多くの人の如くに酔はされなかつた。其が足一度海峡を渡つて朝鮮の土地を踏んでからは全く矛盾した二個の考へが絶えず起つた。其一は此衰亡の國民を憫れむ心であつて、路傍の石に腰掛けて煙管をくはへてゐるソクラテスのやうな老人は何故に他國人に征服されねばならぬのかと憫に思つた。其二は斯く一方に被征服者を憫み乍らも、同時に此の發展力の偉大なる國民を嘆美する心持ちで、「流石に日本人は偉い。」と初めて此爲す有る民族の上に、自己も其民族の一員としての抑へ難き誇を感じるのであつた¹³。』

一言でいうなら、虚子はこのような韓国人の「不潔」を彼らの民族性の結果として理解したのではなかつた。虚子の理解によるならば、朝鮮と日本の主たる差違は、基本的に「発

展」の程度の差違から生じたものであり、それは朝鮮の文明化の不足の結果であった。同様の観点から、彼は中国人に対しても全く同じ評価を下すこととなる。京城の中国人街を訪れた彼が見たのは、「汚れ垢ついた服装をした支那人」であり、それと対照されるのは、やはり「小奇麗」な日本であった¹⁴。

このような文明の程度の差違から韓国や韓国人を認識しようとする考え方は、当時の日本文学者においては、かなり普遍的な傾向であった。この点において、より明確な考えを有していたのは谷崎潤一郎であろう。彼は次のように述べている。

『平安朝を取材にした物語なり歴史畫なりを書かうとする小説家や畫家は、參考の爲に繪卷物を見るよりも寧ろ朝鮮の京城と平壤とを見ることをすすめたい。京城の光化門通りあたりをさまようて居ると、嘗て戯曲「鶯姫」を書いた私は、自分があの戯曲中の人物になつてしまつたやうな氣持ちを覺える¹⁵。』

谷崎にとって、朝鮮は日本の平安時代の段階に留まっている国家であった。彼らに共通するのは、一種の單線的な進歩史觀であり、程度の差こそあれ、両者は共に、朝鮮社会を、彼らの理解する單線的な歴史の中で、日本より遙か過去の段階に位置するもの、と考えていた。その背景にあつたのは、「文明の進歩」に対する樂觀的な姿勢であり、また、その「文明」を達成した日本に対する「誇り」であつた。

注意すべきは、虚子に見られたやうな素朴な進歩史觀の観点からのイメージは、単に韓国にだけ留まるものではなかつた、ということであろう。たとえば、我々はこのことを、明治期日本人の中国イメージからも再確認することができる。すでに、日清戦争はおろか、日清両國が朝鮮戦争で初めて衝突した壬午軍乱の遙か以前の、一八七七年の段階で、日本の新聞には中国人に対する「不潔と無規制」が報じられており¹⁶、それらは、日本人が中国人を揶揄するさいの理由付けとしてすでに広く用いられる状態に至つていた¹⁷。これら明治前期の中国人イメージは、虚子や谷崎が有した韓国イメージとほぼパラレルなものであり、そこに本質的な相違を見出すことは不可能であろう。「韓国人とは不潔なものである」という彼らの韓国イメージは、このような当時の日本人のアジア認識がそのまま現れたものである、と考えるのが自然である。

言うまでも無く、日本人がこのようなアジア認識を持つに至つた原因は、自らの「文明化」を自負する日本人が、西洋人のアジア・アフリカ認識¹⁸をそのまま踏襲したことにあつた。当時の西洋人はアジア・アフリカを、文明化の遅れた、若しくは、文明の存在しな

い土地とみなし、彼らに自らの「文明」を伝達することを「白人の責務」である、と考えていた。彼らにとって「文明」とは自らの有する「文化」そのものであり、異なる文化を有する社会や人々の独自の文化は評価されることなく、均しく「文明」を有さぬものとみなされていた。衛生観念の相違はそこにおける格好の攻撃対象であり、結果、日本を含むアジア・アフリカ諸国の「不潔」は西洋人によって繰り返して強調されることとなる。そして、日本人はそのような西洋人のアジア・アフリカ観を――日本人自身のことはさておき――そのまま継承した。それは日本人がアジア・アフリカ諸国に対するイメージにおいても「脱亜入欧」したことを意味していた。

しかし、それならば、韓国に対するもう一つのマイナスイメージ、すなわち、「危険」はどこから来たのであろうか。次に章を変えて、この点について見てみることにしたい。

第三節 三一運動と韓国イメージの展開

明治後期から一九一〇年代に見られた日本人の韓国のイメージは、文明史観的な「未開」のイメージであった。我々がここで注目すべきは、そこで描かれる韓国の姿は、後に見られるようになるような「危険な韓国」のイメージとはほど遠いものであったということであろう。すなわち、この時代における韓国イメージとは、西洋人がアジア・アフリカについて考えたように、「不潔」と同時に「怠惰」という印象を伴うものであった。再び虚子によってそれを確認するならば、それは次のようなものである。

『今汽車は山間の一小驛に止まつてゐた。其處は洵に淋しい山間の小驛であつて柵の外には白衣の朝鮮人が二三人突立つて如何にも無事に苦しむ人の如くぼんやりと汽車を見てゐた¹⁾。』

当然のことながら、このような不活発な韓国のイメージからは、「韓国は危険である」という認識は出てこない。しかし、このような状況は一九一九年を境に一変する。このような韓国イメージの転換を端的に示すのが、一九二〇年代、朝鮮半島を舞台に数多くの小説を執筆した中西伊之助の作品群であろう。たとえば、それを、彼の代表策である「不逞鮮人」から見て行くなれば次のようになる。

『彼はそれとはつきりと意識すると、急に頭がぐらぐらとした。彼の頭脳の隅から

隅まで、太い金棒で滅茶々に引つ掻き廻されたやうに感じた。彼の寝てゐる處が、パツと怪しい妖氣があつて、あたりは、いつの間にかうら淋しい薄尾花の蔭に、ばらばらになつた鬮體がもの凄くころがつてゐる荒野のやうな氣がした。そして宵のうちに極度の激情を示した主人の姿が、その灰白い薄の中から突立ち上がつて、長い皆が槍の穂尖のやうに閃いて、はつと彼を睨みつけた。一憎悪と復讐に燃え盛つてゐるその眼！ なにが人類愛だ？！ なにが世界同胞だ？！ これを見る！ これを見る！』

注意しなければならないのは、この小説が決して徒に韓国人の「狂暴さ」を訴えようとするものではなかつた、ということであろう。中西は一連の小説²¹の中で、一貫して、不当な支配下に置かれる韓国人の境遇に対し、彼なりの同情の念を表明しており、それゆえ、この小説においても、結局、このような韓国人主人に対する主人公の「恐れ」は、結局、誤解に過ぎなかつた、という結末で締めくくられることとなる。小説の中心となるのは、むしろ、このような韓国人に対する根拠のない「恐れ」であり、自らの心中にある「虚像としての朝鮮」と葛藤する主人公の姿であつた。

本稿において重要なのは、すでに一九二〇年代においては、これらの「恐れ」を、日本人読者が共有し、恐れおののく主人公に共感できるようになつていた、ということであろう。いうまでもなく、このような日本文学者の韓国イメージの一大転換をもたらしたのは、一九一九年に勃発した三一運動であつた。三一運動により、日本人は半島の人間が日本による植民地支配を決して快く思っていないことを思い知らされた。この意味で、中西のこの小説で描かれた韓国人主人が主人公の幻想の中で、「これを見る」と見せつけたのが、三一運動の際に死亡した娘の血塗れの衣裳であつたことは象徴的である。そして、そのような日本人の「恐れ」は、関東大震災時の韓国人大量虐殺へとつながることとなる。

もともと、日本人の朝鮮に対する「恐れ」が三一運動からきたとしても、それがこれほどまでに日本人の間に広がつたのには、もう一つの理由が指摘されなければならない。なぜなら、三一運動における日韓両者の衝突において、圧倒的に多くの被害を出したのは、韓国人側であり、日本人側、特に日本民間人にはほとんど被害が出ていなかったからである。具体的な数字を挙げるなら、この事件を通じての死傷者は、韓国人が一一九〇人であつたのに、日本人は僅か一四一人であり²²、しかも、日本人側の死傷者の大部分は「騒擾」鎮圧に当たつた官憲たちであり、日本民間人の負傷者は官吏のそれを含めて僅かであつた²³。客観的に見るなら、韓国人側が日本人に対して「恐れ」を抱くならともかく、

三一運動を契機に日本人側が「恐れ」を抱くようになるのは、その事件の経過からするなら、矛盾があると言わざるを得ない。

この問題については、これまでこのような日本人の朝鮮に対する恐怖心は、自らの朝鮮支配に対する罪悪感の現れである、という指摘がなされている。筆者の見るところ、このような日本人の「恐れ」を考える上で、具体的な役割を果たしたのは、当時のマスコミ報道であったであろう²⁴。内地のマスコミは、三一運動を報ずるにあたり、これを韓国人の「騒擾」であるとして、現実には数少なかった、韓国人による日本人に対する暴行をセンセーショナルに報じている。マスコミの暴走が、政府の意図的な操作によるものでなかったことは、三一運動勃発当初において、時の原敬内閣がこの事件をさほど重視していなかった²⁵のに対し、マスコミが事件勃発当初から一貫してセンセーショナルな報道を行っていることから明らかであろう。事件にいち早く注目し、これを日本人に知らしめたのは、政府ではなくマスコミであったのである。それは一言でいうなら次のようになる。三一運動により、当時の日本人は、韓国人が日本人による支配を決して望んではいないこと、更には、その日本の支配に対して憎悪に近い感情を有していること、を正確に理解することとなった。しかし、肝心の三一運動そのものに対する印象は、マスコミによって大きく誇張・歪曲され、その結果、日本人は韓国人の憎悪は、日本人全てに対する暴力的な攻撃に直結するものである、と誤解するに至った。いしかえるなら、三一運動において、日本人は初めて自らの植民地支配に罪悪感を抱くこととなった。しかし、日本による支配を「感謝している」はずの韓国人のこのような行動は、日本人に一種のパニックをもたらし、過剰に反応した日本人は、全ての韓国人が日本人に激しい憎悪を有している、とみなし、自らが直接その脅威に晒されている、と考えた。最初にパニックに陥ったのはマスコミであり、そのパニックは確実に日本人全体に広く、そして深く伝播していった。

一九一九年を前後する、日本人の韓国イメージの転換、すなわち、「未開」で哀れむべき存在に過ぎなかった韓国人像から、「未開」であるにも拘らず同時に強かで日本人に「恐れ」を抱かせる存在への転換を如実に示すのは、一九一九年、三一運動勃発直後に書かれた、丹潔の「鉛屋」という作品であろう²⁶。登場する主な人物は三人。「自由の歌」を歌う韓国人鉛屋とその鉛屋と対立する日本人労働者、そして、その両者の間に立ち両者を仲裁する主人公の日本人青年である。袋の中に黒玉と赤玉を入れて朝鮮鉛を売る鉛屋。五銭の代金で、黒玉をとれば鉛が一本、赤玉をとれば一〇本貰えると言う説明を聞いた労働者は、このゲームに挑み、そして敗北を意味する黒玉を引いてしまう。「生意気な」とつかみかかる労働者を、鉛屋は簡単に押さえつけ、一方的に殴りつける。けんかを仲裁した主

人公は、帰り際に立ち寄った西洋料理屋で、半島で主人を殺された旧知の未亡人から求婚される。同じ日、鉛屋は日本の官憲に「自由の歌」を歌って逮捕される。

このどんな歴史書よりも三一運動当時の雰囲気的印象的に示すこの小説において描きだされた韓国人像は、明らかに虚子や谷崎が描いたもの全く異なるものである。すなわち、そこで描かれる韓国人とは、西洋料理に代表される「文明」とはおおよそ縁遠い存在でありながらも、日本人をいとも簡単に打ちのめす「逞しい」存在であり、登場する日本人達は彼を軽蔑と同情と同時に、一種の恐れと畏敬の念をさえ持って接している。見落とされてはならないのは、このような戦前期の日本人の韓国人に対する「恐れ」が、植民地支配下の朝鮮に対する同情と同居していることであろう。「鉛屋」の日本人青年は、鉛屋に深い同情を示しつつも、かつて朝鮮に工場を有し、韓国人労働者を酷使して殺された主人を持った未亡人との結婚を承諾する。それは、結局は、日本人は「日本」を選ばざるを得ないこと、そして、彼らが「日本」が犯した「罪悪」の共犯者足らねばならなかったことを象徴的に示している。

それでは、このような日本人の韓国イメージの変遷について、我々はどのように考えれば良いのであろうか。最後にむすびにかえて、この点について簡単に触れることにより、この小稿を締めくくることとしよう。

むすびにかえて — 反復・再確認されるイメージ

我々の韓国に対するマイナス・イメージはこうして形成されて来た。韓国人は「汚い」、という意識、日本に対して憎悪を有しており「危険」である、という理解、そして更に言うなら、今日の日本人のもう一つの対韓国認識における要素である、植民地支配に対する罪悪感、これらは全て、開国以降、日本が近代化し、植民地を獲得・支配する中で生まれて来たものであった。我々現在の日本人はそれを受け継ぎ、当初の経緯を忘れながらも、独り歩きしたイメージを依然として持ちつづけている。

もつとも、このように言えば、必ず次のような反論が予想されよう。それはつまり、確かに歴史的に見るなら、これらのマイナス・イメージは戦前の日本史の中に、はじめてみられるものかも知れない。しかし、今日、我々が韓国が「汚い」とか「危険」と言う場合に、思い浮かべるのは、たとえば、キムチの大蒜の臭いや、ラングーン事件や大韓航空機爆破事件等の北朝鮮によるテロ事件、更には、韓国における金大中事件や、八〇年代まで盛んに見られた学生デモ等である。もはや、かつての意識と現在のそれは全く別ものなの

ではないのか。

確かにこのような指摘には耳を傾けるべき部分もあろう。しかし、より重要なことは、単に「汚い」とか「危険」に直結するような事象をいうだけなら、それは他国の場合も容易に挙げることができる、ということであろう。この点については、たとえば、同じアジアの国である中国の例を考えれば容易に理解することができよう。韓国は「危険」である、というイメージに挙げられているような事件・事象は、中国についても挙げることができる。近年の台湾近海でのミサイル演習、二度の天安門事件、更には文化大革命や今日頻発する中国人密航組織「蛇頭」による犯罪。重要なことは、にも拘らず、我々日本人は、中国をイメージする際には、これらの事件や事象から、直接的に「だから中国や中国人は危険だ」と考えることはほとんどない、ということであろう。いにかえるなら、中国、そして、他の諸国については、政府や一部組織等の行った犯罪やテロ行為について、我々は、当該国民の個々人や国全体のイメージと独立して、冷静に判断することができる。にも拘らず、こと韓国となると、我々は、これらを余りに単純に自らのイメージと直結させてきた。五〇年代の李承晩ライン、六〇年代から七〇年代の軍事独裁、八〇年代の北朝鮮のテロ事件、取り上げられる事象・事件こそ時代により変化したがあ、そこから導きだされるイメージはいつも同じであった。むしろ、これはもはや次のように考えるのが適切であろう。つまり、特定のイメージから韓国を見た結果、我々はそのイメージに相応しい事件・事象にのみ注目することとなった。結果、我々の韓国に対するイメージは、常に再確認され、これらのイメージは変化することがなかった。

重要なことは、我々が、韓国に対して、冷静に対処する、ということであろう。過去のいきさつは確かに看過されてはならないが、韓国も結局は、「外国」の一つに過ぎず、我々はこのに対して、たとえば中国やアメリカに対するのと同じように対処する必要がある。国際政治というパワーゲームの中で、日本が自らの道を誤らぬためにも、このことは今後ますます重要になろう。

¹ 本稿においては、繁雑さを避けるために、朝鮮半島の民族や国家を代表させる用語として、「韓国」という言葉を用いる。ただし、南北二つの国家を分けて表記する必要がある場合や、歴史的用語を用いる場合には、その限りではない。

² このような日本人の韓国に対するイメージに関しては、たとえば、辻村明他編『日本と韓国の文化摩擦』出光書店、一九八二年、二一頁他。ここではソ連と並んで、韓国・北朝

鮮が「好戦的」とイメージされている。

³ この点については、鄭大均『韓国のイメージ』中央公論社、一九九五年、五頁他。

⁴ 本稿の執筆に際しては、高崎隆治「日本文学者の見た朝鮮 — 作品年表」『季刊三千里』第二八号、一九八一年十一月、を参照した。優れた先学に感謝したい。

⁵ たとえば、李進熙『日本文化と朝鮮』日本放送協会、一九七二年、一四一頁以下。もともと、このような点は、一般啓蒙書にて主張される傾向にあり、李進熙も学問的著作においては、必ずしも「善隣関係」のみを強調しているのではない。たとえば、李進熙・姜在彦『日朝交流史』有斐閣、一九九五年等。

⁶ たとえば、申維翰（姜在彦訳）『海游録』平凡社、一九七四年、の各所。

⁷ この点については、阿部吉雄『日本朱子学と朝鮮』東京大学出版会、一九六五年、に詳しい。

⁸ このような意識はたとえば新井白石に典型的に見ることができる。『日朝交流史』一四〇頁以下。また、矢沢康祐「『江戸時代』における日本人の朝鮮観について」『朝鮮史研究会論文集』六巻、一九六九年六月。

⁹ たとえば、先述「『江戸時代』における日本人の朝鮮観について」。

¹⁰ 先述「日本文学者の見た朝鮮 — 作品年表」。

¹¹ 福沢の朝鮮観については、吉野誠「福沢諭吉の朝鮮観」『朝鮮史研究会論文集』二六巻、一九八九年三月、等を参照されたい。

¹² 高濱清『朝鮮』実業之日本社、一九二二年、六〇—六一頁。

¹³ 『朝鮮』三三—三四頁。

¹⁴ 『朝鮮』一〇四頁。

¹⁵ 谷崎潤一郎「朝鮮雑感」『谷崎潤一郎全集』第二三巻、中央公論社、一九七二年、六二頁。

¹⁶ 『横浜毎日新聞』一八七七年十二月二〇日。

¹⁷ 当時の日本人の中国観については、Akira Iriye ed., *The Chinese and Japanese: Essays in Political and Cultural Interactions*, Princeton University Press, 1980, を参照のこと。なお、同書はミネルヴァ書房から近日翻訳が刊行される予定である。

¹⁸ これと極めて類似するのは、当時の西洋人が有していた黒人に対するイメージである。たとえば、寺田和夫『人種とは何か』岩波書店、一九六七年、一六三頁以下、及び、シール『人種戦争』下、サイマル出版会、一九七一年、三四五頁。

¹⁹ 『朝鮮』一〇四頁。

²⁰ 中西伊之助「不逞鮮人」『改造』一九二二年九月、四六頁。

²¹ 中西が朝鮮について記したものは他に、『赭土に芽ぐむもの』改造社、一九二二年、『汝等の背後より』改造社、一九二三年、「朴烈のことなど」『文芸戦線』一九二六年一月、等。

²² 一九一九年四月三〇日迄の数字。金正明編『朝鮮独立運動』1、原書房、一九六七年、七〇三―七五二頁。

²³ 同年三月一四日までに、民間内地人の負傷者は九名、死者はいなかった。『朝鮮独立運動』1、三七―一三七二頁。

²⁴ 当時のマスコミ報道については、差し当たり、『新聞集録大正史』第七巻、大正出版、一九七八年、の各所。たとえば、『東京朝日新聞』三月一〇日は、「是等は最早示威運動者にあらずして暴民と化し内地人に對しては放火殺人等有らゆる手段を逞しうするものなれば早く鎮撫せざれば其危険圖り知るべからず」と報じている。

²⁵ たとえば、『原敬日記』八、乾元社、一九五〇年、一六九頁以下。三月二日の記事の中には、事件の記載があるが、その後、二九日の山縣政務總監帰京まで、この事件について内閣で真剣な討議が行われた様子はない。

²⁶ 丹潔「鉛屋」『黒煙』一九一九年六月。

参考文献

辻村明他編『日本と韓国の文化摩擦』出光書店、一九八二年

鄭大均『韓国のイメージ』中央公論社、一九九五年

寺田和夫『人種とは何か』岩波書店、一九六七年

高崎隆治「日本人文学者の見た朝鮮 ― 作品年表」『季刊三千里』第二八号、一九八一年
一月

高濱清『朝鮮』実業之日本社、一九一二年

中西伊之助「不逞鮮人」『改造』一九二二年九月

丹潔「鉛屋」『黒煙』一九一九年六月

谷崎潤一郎「朝鮮雑感」『谷崎潤一郎全集』第二三巻、中央公論社